「動物取扱業における犬猫以外の哺乳類の飼養管理基準の細部解釈と運用指針

(解説書) 」における細部解釈 (案)

本日、一部の細部解釈をご議論いただく基準項目 (基準案整理済)

- 清掃について (P2)
- 従業者の員数について (P3)
- 状態悪化時の受診について (P4)
- 輸送に際しての給餌・給水について (P5)
- 繁殖について (P6)
- 訓練方法について (P9)

次回以降、細部解釈をご議論いただく基準項目 (基準案整理済)

- ケージ等の安全な構造及び素材について
- 自然な行動を発現させるための設備について
- 温度計・湿度計の設置、光環境の管理、夜行性に関する飼育環境について
- 複数・単独飼養について
- 給水の時間について
- ワクチン接種について
- 健康及び安全が損なわれるおそれのある状態について
- 捕食・被捕食動物の近接展示について
- 社会化について
- 餌の種類について
- 動物への接触方法について
- 接触・譲り渡しの時間帯について
- 触れ合いの必要性について 等

次回以降、細部解釈をご議論いただく基準項目 (基準案未整理)

- ケージ等の規模について
- 運動スペースに置く時間について
- 展示時間、展示を行わない時間について
- 輸送後の目視観察について
- 夜間営業について

1. 飼養施設の管理、飼養施設に備える設備の構造及び規模並びに当該設備の管理に関する事項

■清掃について <新たに基準は策定せず解説書で具体化>

第2条第1号 ハ 飼養施設に備える設備の管理は、次に掲げるところにより行うものとする。

(1) (2) 略

(3) ケージ等の清掃を一日一回以上行い、残さ、汚物等を適切に処理すること。ただし、草地等において飼養又は保管をする等特別な事情がある場合にあってはこの限りでない。

(4) ふん尿に係る動物の衛生管理のため、ケージ等には、ふん尿の受け皿を備え、又は床敷きを敷く等の措置を講じること。

(5) 保管業者及び訓練業者にあっては、(4)に掲げるもののほか、飼養又は保管をする動物を搬出するたびにケージ等の清掃及び消毒を行うこと。

(6) (7) 略

基準の細部解釈

- ▶ 適切に処理・・・ケージだけでなく、ケージ内のトイレ、えさ場（給餌・給水器）、寝る場所、隠れ場所等の動物と接触する部分について、清掃（消毒を含む）を行い、施設、設備等を清潔に保つこと。残さ、汚物等は取り除き、動物にとって快適な環境を提供するため、敷料の交換等により床表面を清潔な状態に保つこと。
- ▶ 草地等・・・「主に触れ合い施設で取り扱われる中大型哺乳類（ウシ、ブタ、ヤギ、ヒツジ、ウマ、アルパカ等）」を飼養又は保管する際に用いられる、牧場のような広い草地や運動場、小屋の中の敷き藁。
- ▶ 特別な事情・・・牧場のような広い草地や運動場が日に当たることなどで自然乾燥する場合や、小屋で尿が残る敷料を毎日全て撤去せずとも、数日間であればその上に敷料を追加するなどによって敷料全体が乾燥した状態を保つことのできるケース。ただし、敷料を追加することで敷料が腐敗する等の不衛生な状態にならない場合に限る。

参考

ウサギの盲腸便（糞食）について：ウサギは自分の肛門から直接盲腸便を食べることによりタンパク質やビタミンB類などを摂取するため、盲腸便が落ちていたら健康状態の確認を行うことが望ましい。また一度床に落ちた盲腸便は食べないことが多いため、清掃時に取り除く。

残さについて：与えた餌の食べ残しなどを指す。

2. 動物の飼養又は保管に従事する従業者の員数に関する事項

■従業者の員数について <基準・解説書変更なし>

第2条第2号 飼養又は保管をする動物の種類及び数は、飼養施設の構造及び規模並びに動物の飼養又は保管に当たる職員数に見合ったものとする。

基準の細部解釈

- 職員数に見合ったもの・・・清掃、給餌、健康チェック、運動、触れ合い活動、必要な訓練等の適切な飼養保管を行う時間を確保し、個体の飼養保管や施設の維持管理が行き届いた状態を保つことが可能な動物種及び数。

参考

労働関係法令を遵守の上、業務を遂行すること。

推奨事項

- 適切な数の職員の配置・職員の資質の向上・・・動物の飼養保管及び飼養施設・飼養設備の管理を適切に行うためには、取り扱う動物の種類及び数、事業内容等に応じて、適正な数の職員を配置することが望ましい。さらに、よりよい動物の飼養管理の実現のためには、適切な数の職員を配置した上で、1頭1頭の飼養管理により長い時間をかけ、丁寧に世話をすることに加え、職員の知識及び能力等の向上により飼養管理の質を高めることが望ましい。

4. 動物の疾病等に係る措置に関する事項

■状態悪化時の受診について <犬猫の基準を参考とした改正>

第2条第4号 へ 動物が疾病にかかり、又は傷害を負った場合には、速やかに必要な処置を行うとともに、哺乳類の個体の状態が悪化した場合等は獣医師による診療を受けさせること。ただし、特別な事情がある場合にあつては、この限りではない。

基準の細部解釈

- 必要な処置・・・複数の個体を同一ケージで管理している場合は、まずは当該個体を隔離することや、症状が軽微であり、自然に完治することが客観的に明らかな場合に経過観察を行う事を指す。
- 個体の状態が悪化した場合・・・食欲不振や断食（冬眠時は除く）が改善しない、体重低下、歩行障害・異常歩行、糞尿の変化、過剰な発汗、傷口等からの出血、目・鼻・耳からの分泌物、咳や呼吸の異常が見られる、分娩時に難産で母体に負担がある場合。
- 特別な事情・・・かかりつけ獣医師による事前の診察を受けており、診察時に個体の状態悪化時にとるべき対応の指示を受けている場合。

推奨事項

- 動物の状態に関する情報の記録・・・動物の状態悪化を把握するためには、日常的に動物の状態に関する情報（体重、採餌・給水量、給水回数等）を計測・記録しておくことが望ましい。

記録項目（例）

・体重	・採餌・給水量、回数
・糞尿の状態、回数	・毛、爪などの状態
・その他、普段とは異なる行動の有無	・怪我、傷の有無

- かかりつけ獣医師の確保・・・動物の体調不良時や、体調不良の兆候を感知した際に、速やかに相談・受診ができる体制を整えておくためには、かかりつけ獣医師を確保することが望ましい。かかりつけ獣医師が継続的に動物を診察・検査することで、獣医師側にも個体の受診歴や身体的特徴、既往症等の情報が蓄積されるため、健康状態の変化を早期に発見しやすくなるほか、個体の状況に応じた健康管理上の適切な助言を得ることが可能になる。

5. 動物の展示又は輸送の方法に関する事項

■輸送に際しての給餌・給水について <新たに基準は策定せず解説書で具体化>

第2条第5号 ロ 動物の輸送は、次に掲げる方法により行うこと。他者に委託する場合にあっても、次に掲げる方法により行われるようにすること

(1)～(6)略

(7) 動物の種類、数、発育状況及び健康状態に応じ、餌の種類を選択し、適切な量及び回数により給餌及び給水を行うこと。ただし、動物の健康及び安全を守るための特別な事情がある場合は、この限りでない。

基準の細部解釈

- 適切な量及び回数・・・通常の給餌や給水の間隔よりも長い時間輸送するなど、過度の空腹、口渇、疲労が予測される長時間の輸送の場合、輸送前に休息時間を設け、適切に給餌及び給水を行うようにする。給餌、給水の必要性は、輸送する哺乳類の種類、年齢及び状態や輸送時間、天候等によって影響されるため、哺乳類が適切かつ必要な飼料及び水を利用できるよう、休息を与える回数や間隔を適切に設定する。

【ウサギ】・・・輸送中、適切な餌と水が十分な量で利用可能でなければならない。

【げっ歯類（マウス、ラット、モルモット、ハムスター類など）】・・・短時間の輸送の場合には、給餌・給水は不要だが、車両や公共交通機関を利用し、到着時間が遅れるなど不測の事態が生じる可能性がある場合は給餌器や給水ボトルを設置する。

【小型サル類（マーモセット等）】・・・輸送が4時間を越える場合は、給餌器や給水ボトルを取り付け、給餌、給水を行う。

【主に触れ合い施設で取り扱われる中大型哺乳類（ウシ、ブタ、ヤギ、ヒツジ、ウマ、アルパカ等）】・・・水が飲めない断水時間は4時間未満とする。そのため、移動時間が4時間を超える場合には、途中で給餌・給水を行うための休息時間を設けること。

【ウシ・ヒツジ・ラクダ科の動物】・・・輸送4時間前までに給餌を済ませること。

なお、輸送する家畜の種類、年齢及び状態や輸送時間、天候等によって、より頻繁な給餌・給水が求められる場合は、その状況に合わせて給餌・給水を行うこと。また、輸送中に給餌する餌の種類や給餌及び給水方法が、通常の飼養管理と変わる場合、事前に馴化措置をすること。

- 特別な事情・・・獣医師に事前の診療を受け、不安、緊張、運動不足あるいは輸送時の騒音、振動などの種々の影響のため食欲が落ちることが懸念されるため、給餌・給水を行うべきではないと指示された場合など。

推奨事項

- 適切に給餌・給水を行うための休息・・・【P】

6. 動物を繁殖の用に供することができる回数、繁殖の用に供することができる動物の選定 その他動物の繁殖の方法に関する事項

■繁殖について <犬猫と同様の基準への改正>

第2条第6号 イ 販売業者、貸出業者及び展示業者にあつては、販売、貸出し又は展示の用に供するために動物を繁殖させる場合には、遺伝性疾患等の問題を生じさせるおそれのある動物、幼齢の動物、高齢の動物等を繁殖の用に供し、又は遺伝性疾患等の問題を生じさせるおそれのある組合せによって繁殖をさせないこと。ただし、希少な動物の保護増殖を行う場合にあつてはこの限りでない。

ロ 販売業者、貸出業者及び展示業者にあつては、販売、貸出し又は展示の用に供するために動物を繁殖させる場合には、みだりに繁殖させることにより母体に過度な負担がかかることを避け、飼養施設の構造及び規模、職員数等を踏まえて、その繁殖の回数を適切なものとし、必要に応じ繁殖を制限するための措置を講じること。

ハ 販売業者、貸出業者及び展示業者にあつては、販売、貸出し又は展示の用に供するために動物を繁殖させる場合にあつては、動物の繁殖の実施状況について記録した台帳を調製し、これを五年間保管すること。

ニ～ヘ（略）

ト 販売業者、貸出業者及び展示業者にあつては、販売、貸出し又は展示の用に供するために哺乳類を繁殖させる場合には、必要に応じて獣医師等による診療を受けさせ、又は助言を受けること。

チ 販売業者、貸出業者及び展示業者にあつては、販売、貸出し又は展示の用に供するために哺乳類を繁殖させる場合であつて、帝王切開を行う場合にあつては、獣医師に行わせるとともに、出生証明書並びに母体の状態及び今後の繁殖の適否に関する診断書の交付を受け、これらを五年間保存すること。

リ 販売業者、貸出業者及び展示業者にあつては、販売、貸出し又は展示の用に供するために哺乳類を繁殖させる場合には、第四号ハに規定する健康診断、トに規定する帝王切開の診断その他の診断の結果に従うとともに、繁殖に適さない哺乳類の繁殖をさせないこと。

基準の細部解釈

- みだりに繁殖させること・・・繁殖力が強い生態を持つ種の雌雄（特にウサギ、ハムスター、その他小型げっ歯類など年中繁殖可能な哺乳類）において、一定の休息期間を挟むことなく、多数の子を繰り返し妊娠・出産させ続ける行為などを指す。
- 獣医師等による診療を受けさせ、又は助言を受けること・・・獣医師による診療や助言及び、愛玩動物看護師による助言を含む。
- 診療・・・哺乳類の繁殖における適否等の診断及び、繁殖を可能にするための治療。

参考

- ▶ 繁殖実施状況記録台帳について・・・繁殖の実施状況について記録した台帳を作成し、これを5年間保存することが義務付けられているため、参考様式に示した項目について記録された台帳を5年間保存する必要がある。

交配等 年月日	雌 (個体識別番号、名称等)	雄 (個体識別番号、名称等)	出産 予定日	出産 年月日	出産数	出産後の雌 の状態	新生子 の状態	備 考
						健・否	健 康: 疾 病 等: 死 亡 等:	

※なお、繁殖状況実施台帳の様式は今後修正予定。

牛や豚などの畜産動物の繁殖は、人工授精によって行われることが多い。人工授精については、家畜改良増殖法では、有資格者のみが実施できると規定されており、留意が必要。

推奨事項

- ▶ 犬猫以外の哺乳類を繁殖させる際に留意すべき点
 - 繁殖用に販売または飼養するために、交配時に一時的に雄雌を同一ケージで飼養する場合、短期間に何度も繁殖することにより母体に過度な負担がかからないよう、交配後は速やかに分離するなどの配慮が望ましい。
 - ハムスター：妊娠した雌は神経質になり、気が荒くなるため取り扱いには注意する。出産後にストレスを与えると仔食いをする例が多い。
 - モルモット：妊娠期間が長く、胎仔も大きいため妊娠中毒や難産が多発する。また成長にともない恥骨結合が癒合するため7~8か月齢までに最初の繁殖をさせないと難産が好発する。
 - マウス、ラット、スナネズミ：ケージ内の掃除は、出産してから2~3日はしないようにする。
 - チンチラ：産まれる子供は想像以上に小さいので、小さめの網目のケージを準備する。
 - シマリス：警戒したり不安になったりしないよう落ち着いて暮らせるようにしてあげる。巣箱が小さいなら十分な大きさのものに早めに交換する。使用中の巣材を入れてあげ、不安にならないようにする。野生のシマリスの子育ては地下の巣穴で行い、樹洞の巣穴は使わないため、高い位置に巣箱を設置しているなら、床の上に巣箱を置く。
 - ハリネズミ：掃除は控えめにし、薄暗くしておくといよい。
 - フクロモモンガ：妊娠中や子育て中の掃除はほどほどにする。ケージの中をむやみにいじられることがストレスとなり、育児放棄や子食いする可能性がある。人間のおいが子供につくと、子食いや育児放棄の原因になるため、ゴム手袋着用が望ましい。
 - 主に触れ合い施設で取り扱われる中大型哺乳類については、定期的な健康診断を行っておくことが望ましい。
 - 雌ウシと比較して過度に大きい雄ウシを交配させると難産になるおそれがある。

7. その他動物の愛護及び適正な飼養に関し必要な事項

■訓練方法について <哺乳類共通の基準を新たに策定>

第2条第7号 ナ 展示業者及び訓練業者にあつては、動物に演芸をさせ、又は訓練をする等の場合には、動物の生理、生態、習性等に配慮し、演芸、訓練等が過酷なものとならないようにすること。また、殴る、蹴る等の身体に外傷が生じる又は生じる恐れのある行為、暴力を加える行為、心理的抑圧・恐怖を与える行為、過度に餌を減らす行為等を行わないこと。

基準の細部解釈

- 心理的抑圧・恐怖を与える行為・・・大声で怒鳴ったり、動物の近くで大きな音を出したり、その健康及び安全を保持することが困難な場所（狭いケージ等）に拘束したり、飼養密度が著しく適正を欠いた状態で飼養又は保管したり、ムチ等を振り上げて叩くふりをしたり、動物の近くに物を投げつけたり、不必要に動物へ強い電気ショックを与えること等により、動物を怯えさせる行為。
- 過度に・・・餌を減らすことによる影響として、動物がストレスによる行動を起こす又は健康状態に支障を及ぼすおそれのある程度。

※補足：不適切な訓練方法による動物の状態について、チェックポイントを検討【P】

推奨事項

- しつけ・訓練方法・・・動物の好ましい行動（人が望む行動）をほめて強化する（その行動がさらに強く多く出るようにする）「正の強化」を用いた方法が推奨されており、動物が好ましい行動をとったときに、報酬（食べ物や動物が好むこと）を与えるとよい。【P】

特に、動物園や水族館では、採血や体重測定などの獣医学的処置、放飼や収容などの日常管理、採尿や体毛の採取などの調査研究などに、動物が自発的に協力するように促す訓練（ハズバンドアリートレーニング）が行われている。体罰などの嫌悪刺激を用いずに望ましい行動の直後に食物などの快刺激を用いて望ましい行動を増加させる「正の強化」が主に用いられているため、動物福祉の観点からも望ましいとされており、日常管理や調査研究に従事する者にとっても作業負担が軽減され、高い安全性が認められている。